

## 高大接続を視点としたライティング教育の実践

竹内元<sup>1</sup>・深見奨平<sup>2</sup>・湯田拓史<sup>1</sup>

### 要旨

本実践報告は、ロジカルコミュニケーションを中心としたライティング教育の高大接続カリキュラムを検討するために、宮崎県立高鍋高等学校と連携して実施した実践報告である。本報告では、遠隔リアルタイム方式の授業による課題作文に対する複数の大学教員の指導助言を整理することを通して、高鍋高等学校が使用しているテキストの問題点を検討した。

### 1. 実践の概要

本実践報告は、ロジカルコミュニケーションを中心としたライティング教育の高大接続カリキュラムを検討するために、宮崎県立高鍋高等学校と連携して実施した実践報告であり、遠隔リアルタイム方式の遠隔授業による課題作文に対する複数の大学教員の指導助言を整理することを通して、高校生・大学生の論理的思考力に関する課題を検討したものである。本実践は、教職実践基礎コースの教員によるFD活動でもある<sup>1)</sup>。

高鍋高等学校が使用しているテキストは、『論理コミュニケーション[第2版]』（梅嶋真樹ほか、慶応義塾大学出版、2011年）である。

本書によると、日本論理コミュニケーション技術振興センターは、社会で必須とされるコミュニケーション力は、「論理的に聴く」「論理的に構築する」「論理的に伝える」の大項目、3つの階層、14のクラスターで構築できると定義し、この実践力を「論理コミュニケーション力」と命名している。「論理的に聴く力」とは文章を読む時や、人の話を聴く時に相手が何を言いたいかを整理し理解する力であり、「論理的に構築する力」とは、情報を得て、それを踏まえ自分の意見を頭の中で考える力であり、「論理的に伝える力」は、自分の意見や根拠を構築し他者に伝える力である。

少数派の意見や自分独自の意見は、そもそも相手が理解できないところから始まる。相手が理解できる根拠を並べ、自分の妄想ではないことを説明しなければならないのが、論理コミュニケーションである、と梅嶋らは指摘する。根拠とは、全く異なる考えの人に、自分自身が考えたプロセスを再現することにより、その意見をなぜ考えたのかを理解してもらう方法なのである。根拠はなぜその意見を考えたのかであり、根拠を出すことはその意見を考えるまでの過程を整理する作業である。人は一人ひとり異なるプロセスで物事を考えているが、そのような自分とは異なる人に、自分が考えていることを伝えるためには、なぜそう考えたのかという根拠を伝えることが必要なのである。意見だけでは意見の良し悪しは決められない。意見の中には、相手に「伝える準備がある意見」と「伝える準備ができていない意見」が混ざっている。意見を出す段階では、どの意見が伝える準備ができていないのかはわからない。そのため、意見

---

<sup>1</sup> 宮崎大学大学院教育学研究科

<sup>2</sup> 宮崎大学教育学部

を書く際に「これは良い意見かどうか」は考えることに意味がないという。だからこそ、思いつくものはすべて書いておき、根拠を出してからどの意見を出すかを判断する必要がある。いったん出した意見に対して、「なんでそう考えるのか？」を自分自身に問いかけて、根拠を出せる意見が相手に「伝える準備ができている意見」なのである。

梅嶋らは、現在の高校生を中心とした学生らが抱える課題は、文章という全体システムを設計する際に、「意見」または「根拠」というモジュール自体は自分で制作できるが、文章という全体システムの中で「意見」や「根拠」といったモジュールが持つ意味合いとそれぞれのモジュールをつなぐルールが理解できていないことだと指摘している<sup>2)</sup>。

実践の実施日と高校生が取り組んだ課題等は、以下の表1のとおりである。

表1：実施日や課題等一覧

実施日	担当大学教員	課題テーマ
2021年7月14日(水)	竹内元	あなたは学校でどんな行事を行いたいですか
2021年9月29日(水)	深見奨平・竹内元	あなたはいつから英語教育を始めるべきだと考えるか
2021年10月27日(水)	湯田拓史・竹内元	日本においてイノベーションを多く起こすには、どうすればいいと考えますか

高校生は、探究学科3年生14名が参加した。Zoomによる遠隔リアルタイム方式で行った。1回あたり50分の全体指導である。

## 2. 指摘したコメント

高校生に指摘したコメントは、以下のとおりである。

〈7月14日〉

・意見は、多数の人が持つ常識ではなく、少数派である。たとえば、「あなたは学校でどんな行事を行いたいですか」と問われたとき、体育祭、スポーツ大会、球技大会、芸術鑑賞、職場体験などはすでに多くの高校でも行われているので、多数派の意見である。料理教室やきもだめし、花火大会、ハロウィンなどの催しも、「あなたはどんな行事を行いたいですか」と聞かれると、多くの人がイベントを考えるという点で多数派の意見となる。「行事」という言葉をどのように考えるかという点に工夫が必要になり、「昼寝の時間を作る日」や「私服で登校する日」のように、どんな日にしたいかと視点をずらしたり、「体育大会を1日だけでなく2日間にわたって行いたい」など既存の行事を改善したりすることが求められる。「意見」を考えたとき、①できるだけたくさん意見を挙げるだけでなく、②列挙した意見を「常識」と「少数派意見」に分けるという作業が必要ではなかったか。

・みんなが言うこと(常識)を、自分なりに説明するという点では、ミクロからマクロへと語る対象を変えて根拠を示したり、根拠を述べる順番に工夫をしたりする必要がある。根拠をどのように述べるか、どういう立場や視点で根拠を述べているかを自覚し、順番を工夫すると文章は根拠の示し方に独自性が生まれ、人に訴える文章になるのではないか。

〈9月29日〉

・文書を書いた後に、読む側に立って読み返す必要がある。テーマにある問いに答えているか。

自分が書いた字は、どのように読み手に伝わるのか。自分が示した事実は、正しいのか。伝聞なのか、説明なのか。書いている自分は、どういうテーマとして理解しているか、読む側はどのようなテーマとして設定しているのか、そこにズレはないか。自分が書いた文章が相手にどのように伝わるのか、推敲しなければならない。

・テーマは、「英語をいつから学習するか」ではなく、「英語教育をいつから始めるのか」である。「いつから」にとらわれるのではなく、なぜ英語教育なのか、そもそもなぜ早く始めるべきなのかといったテーマの解題が必要である。なぜと自己に問いかけ、テーマの本質をつかまえてやることが求められる。

・根拠に対する事例が、根拠に対するデータや事実になっていない論述があった。示している事実やデータは、根拠の信用性を高めているか、自分の文章をチェックする必要がある。そのさい、「言えると思う」という無駄な表現も見られるので、文そのものを洗練させ、データや事実を示す字数を確保する必要もある。

・文章を書くことに不慣れなうちは、読む側に立って考えることは難しい。このような読み手志向のライティング訓練としては、他者の文章を批判すること、他者に自分の文章を批判してもらうことが役に立つ。「批判」とは、「非難」や「誹謗中傷」ではない。相手の主張と根拠がつながっているか、その根拠は信用できる根拠か等の視点から、主張の論理性を判断することである。書き手になるだけでなく、読み手になる経験を積み重ねてほしい。

・一方で、他者の文章を批判するなかで優れた文章や粗雑な文章に触れることで、読み手の立場を知り、読み手は何を欲しているのかを体験的に理解することができる。他方で、他者に自分の文章を批判してもらうことで、自分の文章にどのような視点が不足していたかを直接的に知ることができる。はじめのうちは他者から指摘を受けてそのたびに修正を施し、より良い文章へと洗練させていくという過程を経る。そして最終的には他者の視点を自分の頭の中で想像し、自分で自分の文章を一步引いて読むことができるようになるのが理想である。

・書いた文章を大学教員が論評する前に、いくつかステップが必要である。例えば、①隣同士のペア活動、②学級全体での検討、③学年での検討、④上級生等の検討、⑤高校教員による検討のように。このようなステップを通して、生徒は書き手の経験と読み手の経験を積み重ねるとともに、他者の書き方や読み方から学ぶこともできるだろう。また、このような一連のプロセスは繰り返し行うことでより洗練され、表現力と読解力を高めていくことにつながる。大学教員の側からも、文章の論理構造やテーマの趣旨の読み解き方等、限られた時間の中でより本質的な論評を行うことができるだろう。

〈10月27日〉

・今回は、「イノベーション」という概念が置かれた状況説明と「イノベーション」と他の概念とをかけあわせた論究が多かった。これだと次々にイメージがあふれてしまい、かえって複雑になる危険性がある。むしろ、「イノベーション」という概念が含む下位概念をつきつめていくことが必要である。使う概念を削っていく作業が必要である。新明解国語辞典をひくとよいのではないか。

・概念には、本質がある。本質から概念をつかむ。現状に問題がある点を指摘できるとよい。さらに、「日本でイノベーションが起きにくいのはなぜか」と、テーマの対偶にある問いを考えると、もとの主張を批判しながら、自分の意見を言うことができる。

・主張と理由だけだと、論理的な意見にはならない。「なぜ」をもう一つ繰り返すか、「たとえ

ば」と例示するか、「なぜそうならなかったのか」を考える必要がある。読み手の思考形式を想定して、論を深めてほしい。

・主張は、全文を書いた後に、リライトする。限定したり、主従関係を確認したり、用語の使い方を確認したり、一語一語を確認すると、切れ味のある文章になる。

### 3. 考察と今後の課題

『論理コミュニケーション[第2版]』では、文章を書き始める前に自分の頭の中を整理する道具として「文章の設計図」というワークシートが示されている。文章の設計図には、5つのStepと9つのルールがある。以下のようなプロセスになる。

Step1 「意見を書き出す」

- ①思いつく限りの意見を書き出す
- ②根拠が出せそうな意見を2つ選ぶ

Step2 「根拠を書く」

- ③選んだ意見のそれぞれに対して根拠を書く

Step3 「事例を出す」

- ④出した根拠に対して、それぞれ事例を出す
- ⑤説得力のある根拠と事例が書けた意見を一つ選ぶ

Step4 「文章を構成する」

- ⑥今回選んだ意見の根拠を3つに分け、グループにまとめる
- ⑦各順序を決め、意見と根拠をそのまま原稿に写す
- ⑧根拠にグループ名をつける

Step5 「文章にする」

- ⑨接続詞を加えながらStep4の部分をつなげて文章にする

実践を通して得られた課題は、以下のとおりである。

一つには、『論理コミュニケーション [第2版]』では、意見を出し、根拠を書き、出した根拠に対してそれぞれ事例を出した上で、意見と根拠をそのまま書き写すと提示されているので、生徒が説得力のあると考えた根拠が文章として列挙されることに留まることもあり、事例が文章に抜けてしまうことがある。意見と根拠という二者関係でとらえてしまって、意見と事例をつなぐ論拠・理由づけという点が意識されにくいのではないだろうか。

二つには、意見を書き出す前に、テーマの対偶にある問いを考えたり、どういうテーマとして理解するかを検討したりするプロセスがない点である。「事実・データ」と「意見」と「論拠」という軸に、「問題」と「テーマ」と「結論」という軸を組み合わせ、与えられたテーマがどういう問題を解決しようとしているのかを意識させる必要がないだろうか<sup>3)</sup>。

三つには、構成された文章を点検・修正するプロセスがない点である。だから、根拠に対する事例が、根拠に対するデータや事実になっていなかったり、自分の書いた文章が相手にどのように伝わるかを推敲できていなかったりすることがあるのではないだろうか。

今後は、探究科学コースを持つ宮崎県立日南高等学校や宮崎県立小林高等学校との連携も視野に実践を積み重ねるとともに、高校教員との研修や研究会を実施するなかで、高大接続を視点としたライティング教育プロジェクトを構築していきたい。

#### 4. 注

- 1) 教育行政・学校経営分野と教育課程・授業研究分野の大学院専任教員も含めた学部教職実践基礎コースを担う研究者教員 7 名は、宮崎県立宮崎南高等学校の課題研究指導も担っている。探究とライティング教育は密接に関連しており、教職実践基礎コースでは、FD 活動として宮崎南高等学校の課題研究指導も含めて、論理的思考力の形成や高大接続の在り方などを協議してきた。本報告もこうした FD 活動の一環に位置づくものである。なお、宮崎県立高鍋高等学校とは、教育協働開発センターを窓口に関連してきた。探究学科を対象とするロジカルコミュニケーションのほかに、普通科や生活文化科を対象とする 1 年生地域探究の成果発表への指導助言にも協力している。
- 2) 梅嶋真樹ほか『論理コミュニケーション[第 2 版]』慶応義塾大学出版、2011 年、参照。さらに、本書では、複数の文献と 1 つの主張の関係性を読解する「1 対 N の読解」を求めている。「1 対 N の読解とは」とは、複数の文献と 1 つの主張の関係性を読解することであり、1 つの文献に書かれた新しい主張とその文献の参考文献となっている複数の先行研究の関係性を読解しようというのである。今回の実践は、文書の設計図を活用した論理的な意見文を書くところに対応したものであり、1 対 N の読解を行い、関係性を記述する点は扱っていない。
- 3) 松下佳代『対話型論証による学びのデザイン ― 学校で身につけてほしいたった一つのこと』勁草書房、2021 年、参照。